

妖怪わさわさ

く童のもとに青蛙神の来し晩、百鬼夜行に遭いたることく

引用

岡本綺堂「青蛙堂鬼談」

編著者未詳「宇治拾遺物語 卷第一の十七」

語り

杭州に金華將軍なるものあり。

けだし青蛙の二字の訛りにして、その物はきわめて蛙に類す。ただ三足なるのみ。

そのあらわるるは、多く夏秋の交にあり。

降るところの家は秫酒じゅっしゅいちゅう一盃を以てし、その一方を欠いてこれを祀る。

その物その傍らに盤踞して飲み喰らわず、しかもその皮膚はおのずから青より黄となり、さらに赤となる。

祀るものは將軍すでに酔えりといい、それを盤にのせて湧金門外の金華大侯の廟内に送れば、たちまちにその姿を見うしなう。

而して、その家は数日のうちに必ず獲るところあり、云々。

蝉の声が盛り上がって落ちる。

少年と母、机を挟んで向かい合って座っている。

母　　なんでなの

少年　なんででしょう

母　　なんで2ばっかなの

少年　1はまぬがれた

母　　なんでこんなに出来が悪いのよ

少年　母さんに似たんだよ

母　　なんで母さんに似たのよお。父さんに似てくれれば頭が良かったのに（お鈴ちゃん）

少年　己の遺伝子が引き継がれたことを喜ぶべきだよ

母　　我が子がいきなり天才になればいいのに

少年　勉強しないですむ方法があればいいのに

ピンポーン

母　　はい

行商人　ごめんください、ちよっと商品をご覧くださいませ

行商人が母に販売する間に少年の独白。

少年　学校に通ってればいろんな奴を見る。一番いいのは明るくて努力家で社交的で頭の回る人間だ。それでなくとも、ひょうきんなやつ。誰かが引き立ててくれる。地味だけど人当たりのいいやつ。ひょうひょうと世渡りをする。態度は悪いが頭の良いやつ。知恵で上まで登って行くだろう。ところがぼくときたら、生来の面倒くさがりで友達も少ない。勉強については神様が納期に追われて徹夜明けにこさえたみたく、ひどい有様だった。ああ、努力しないで頭が良くなりたい。神様仏様

母　　蛙様！

少年　蛙様？

母　　いい買い物しちゃった。お酒とお米を供えてお願いすれば叶えてくれるんですって。蛙様、うちの子を天才にしてください、いい、なんちゃって

少年　買ったの？ああ、まただまされて！

母　　だって安い。ななきゅっぱ。7980円

少年　高いよ。僕の成績よりも母さんのリスク認識の甘さの方が問題だよ

母　　なによ偉そうに。梅沢先生への月謝より安いわよ。梅ちゃんこういうの詳しかったな。ねえ、今日の塾のときにお祈りの仕方聞いてきてよ

少年　こんな話恥ずかしくって言えないよ。だいたい蛙様って…と箱をのぞいてみると…気持ち悪い。

そこには蛙に似た置物があった。ただ少し違うのは通常2本あるべき後ろ足が1本、つまり全部で三足だということだ。

母と梅沢入れ替わっている。

梅沢　それは青蛙神という願いを叶える中国の福の神だね。
本来は

少年　本来は？

梅沢　訪問販売というのが気がかりだ。触らぬ神に祟りなしというし、まがい物かもしれない。然るべき寺社に預けるのが良いだろう

少年　だから言ったんだ

梅沢　帰ってこのことだけでもお母さんに伝えておいで。きみのためにせっかちになってもいけない

少年　あの人世の中を甘く見過ぎなんだ。少しくらい痛い目みたほうがいいよ

梅沢　少しくらい痛い目みたほうがいいかい？

少年　少しくらい痛い目見たほうがいいよ

梅沢　ふむ、では今日の授業を始める

少年、机に向かい

少年　母さんの幼馴染である梅沢先生の本職は弁護士だとうが、僕が物心ついたときにはもう、法律事務所の看板を外してしまっただけで、今ではこちらの商店の顧問という格でおさまっている。たいそうな趣味人で、俳句をたしなんだり、僕のような不出来な学生を相手にしたりする。

梅沢　今日はここまで。困ったらこれを読んでご覧

少年　それは古い文庫本だった。ああ、がえる、どう

梅沢 青蛙堂鬼談。例の蛙の神様が出てくる小説だよ。ふむ、雨が降りそうな気配だな。気味の悪い生き物たちが蠢いている。よく気をつけて帰るんだよ。道に迷ったら動かさずその場で朝を待つことだ。妙なものを見かけても無視をせよ。もし見つかったら遊ぶ方がいいが、向こうの誘いにのってはいけない。こちらから提案して遊んで朝まで過ごせ。いいね

少年 からね。子供じゃないんだから。家まで10分もかからないんだからね。

少年　しかし、僕はもう10分以上歩き続けている。感覚では30分か、1時間か、それ以上。細い通り、大きな門、古めかしい屋敷。その角を左に曲がれば僕の家のはずだが、細い通り、大きな門、古めかしい屋敷。細い通り、大きな門、古めかしい屋敷。曲がっても、曲がってもその光景が続く。僕はくたくたになつて、先生が「その場で動かず朝を待て」と言つたことも忘れ、ついに扉をノックする。

ごめんくださいーい。誰かいませんか？

扉に手をかければ、鍵はかかつていない。ずいぶん不用心だ。

道に迷つてしまつて、一晩泊めてもらえませんか。

しかし返事はない。諦めて僕は上がりこむと、居間のソファに腰をおろし、誰かが来たら言い訳しよう、と思う間に眠りに落ちた

(あやしのうた)

あやし あやし われらはあやし

百も生きれば化かし出す その半分でもまあよかる

まつり まつり 今宵はまつり

百も揃えば楽しかる その半分でもまあよかる

あやし あやし あやしのまつりの道行よ

少年　どれほど経つただろう。賑やかな声で目が覚めた。スマホで時間を確かめたが、電池が切れている。部屋の時計は古いらしく動いていない。声は、1人、2人、もっと多い。今日は何か集まりがあつて遅くなつたのだろうか。留守に勝手に入つてしまった詫びと、一晩泊めてもらう交渉をするために体をおこし、扉をそつとひらき、見て見れば。

あやし　人々の声あまたしてくる音すなり。みれば手ごとに火を灯して、人、百人ばかりこの堂のうちに来、集いたり。近くて見れば、目一つつきたりなどさまさまなり。人にもあらずあさましきものどもなりけり。あるいはツノ生いたり。頭もえもいわず、おそろしげなるものどもなり

少年　ばけものだ！

あやし 誰だ、お前

少年 しまった。あやしいものを見ても無視をせよと先生に
言われたのに

あやし くんくんくん。人間のおい

少年 ええと、見つかった場合は

あやし 見られた以上食べないわけにいかない

少年 朝まで遊んで時間を稼ぐんだ

あやし いただきます

少年 待った！僕を食べると損をするぞ！

あやし なんだって？

少年 実は僕は今日面白い遊びを持って来たのだ

あやし 面白い遊び？

あやし 気になるな

あやし 遊んでから食っても悪くない

あやし だが気をつけないと、人間は時々我々を騙す

あやし 鬼ごっこがいいよ

あやし つかまえたやつを食ってもいい

あやし それで面白い遊びというのは

少年 あの、その、この本だ（と、青蛙堂鬼談を出す）

あやし なんだ本なんてつまらない

少年 ええと、もちろん、ただ読むだけじゃない。芝居をす

るんだ

あやし 芝居？

少年 そうだ、芝居だ。芝居にすれば時間が稼げそうだ

あやし 酒もってこーい

あやし ちよっと面白そうじゃないか

少年 すっごく面白い

あやし 漢字が読めない

少年 なんて好都合。じっくり教えてあげるよ

あやし 読めない奴は客になればいいんだよ

あやし そうだそうだ

少年 敵も決して甘くない

あやし 本は一冊しかないぞ

少年 順番に読んで、少しずつ覚えていけばいい

あやし 時間がかかるばかりでつまらん

少年 時間がかかるからいいんじゃないか

あやし 早く人間食べたいよ

あやし あんたたち、コンビニでコピーをしておいで

あやし ついでにアイスも持ってこよう

あやし おでんはあるかな

あやし おでん、おでん、われらのおでん

少年 化け物たちが誘いに乗ったぞ！助かった！向こうの誘いではなく、こちらの誘いに乗せる。あとは朝まで時間を潰すだけだ。今いったい何時なんだろう。先生は僕がこうなることがわかっていたのだろうか。母さんは、心配してるだろうか…。

あやし コピー、A4、モノクロ、100

コンビニバイト きゃーっ、コピー機が勝手に動いてる！

暗転。

小さな明かりがついて、机につっぷしている母。

携帯電話を、コールして、また机に顔をうずめる。

母　もう、どこへ行ったの。（お鈴チーン）お父さん、あの子を守ってください。蛙の神様、あの子を無事に家に帰してください。

と、青蛙神の入った箱が青く光る。青から赤、黄色：

暗転。

少年が電気を灯すと朗読劇がスタンバイされる。

少年、鈴を鳴らす。

少年　あやしのまつりのせいあじん、はじまり、はじまり

語り　時代は明の末で、天下が大いに乱れんとする時。張訓という武人があった。ある時、将軍が宴をひらいて、列席の武官と文官一同に詩や絵や文章を自筆でかいた扇子一本ずつをくれた。一同ひどく有難がって、めいめいにひらいてみる。張訓もおなじく押し直してひらいて見ると、どうしたわけか自分の貰った扇子だけは白扇で、なにも書いてない。

張訓　これには甚だ失望したが、わざわざ言うのも礼を失うと思ったので、なにげなくお礼を申して退出した。しかし何だか面白くないので、家へ帰るとすぐにその妻に話した。

将軍も一度にたくさんさんの扇子をかいたので、きつと書き落としたに相違ない。それがあいにくおれに当たったのだ。とんだ貧乏くじをひいたものだ。

語り　妻は三年前から張と夫婦になったもので、小作りで色の白い、右の眉のはずれに大きいほくろのある、まことに可愛らしい女であった。

妻　それはあなたのおっしゃる通り、将軍は別に悪意があつてなされたことではなく、お書き落としたに相違ありません。あとで気がつけば取り換えてくださるでしょう。いいえ、きつと取り換えてくださいます

張訓　しかし気がつくかな

妻　なにかのはずみに思い出すことがないとも限りません。それについて、もし将軍から何かお尋ねでもありましたら、そのときには遠慮なく、正直にお答えをなさる方がようございませ

語り　それから二日ほど経つと、張訓は将軍の前に呼び出された。

将軍　おい、このあいだの晩、おまえにやった扇子には何が書いてあったな

張訓　実は、頂戴の扇子には何も書いてございませんでした

將軍 なにも書いてない。なるほど、そうだったかもしれない。それは気の毒なことをした。では、その代わりにこれをあげよう

張訓 これは見事な七言絶句。ありがとうございます

妻 それだから、わたくしが言ったのです。將軍はなかなか物覚えのいいかたですから

張訓 そうだ、まったく物覚えがいい。大勢のなかで、どうして白扇がおれの手にはいったことを知っていたのかな

張訓と妻、顔を見合わす。

語り それから半年ほど経つと、賊軍が蜂起して国は大いに乱れて来たので警戒しなければならぬ。太平が久しくつづいて、誰も武具の用意が十分であるまいというので、將軍から部下の者一同に鎧一着ずつを分配してくれることになった。張訓もその分配をうけたが、その鎧がまた悪い。

張訓 古い鎧だし破れている。こんなものが、大事のときに役に立つものか。いっそ紙の鎧を着たほうがましだ

妻 それは將軍がいちいちあらためて渡したわけでもないでしょうから、あとで気がつけばきつと取り換えて下さるでしょう

張訓 そうかも知れない。いつかの扇子の例もあるから

語り 三日後

將軍 この間の鎧はどうであったか

張訓 実は、破れておりました

將軍 むむ、おまえの家では何かの神を祀っているか

張訓 いえ、一向に不信心でございまして、なんの神ほとけも祀っておりません

將軍 おまえの妻はどんな女だ

張訓 三年前から夫婦になったもので、小作りで色の白い

將軍 そうして、右の眉の下に大きいほくろはないか

張訓 よくご存知で

將軍　むむ、知っている。おまえの妻はこれまで、二度もおれの枕もとへ来た。

半年ほど前に、おまえたちを呼んでおれの扇子をやったことがある。その明くる晩のことだ。ひとりの女がおれの枕もとへ来て

妻　昨日張訓に下さいました扇子は白扇でございました。どうぞ御直筆のものとお取り換えをねがいます

將軍　そこで、念のためお前をよんで訊いてみると、果たしてその通りだという。そのときも少し不思議に思ったが、まずそのままにしておく、またぞろその女がゆうべも来て

妻　先日張訓にくださいました鎧は朽ち破れていて物の用にも立ちません。どうぞしかるべき品とお取り換えをねがいます

將軍　おまえの妻はいったいどういう人間だか知らないが、どうも不思議だな

張訓　まったく不思議でございます。よく詮議をいたしてみましよう

將軍　いずれにしても鎧は換えてやる。これを持ってゆけ

張訓　と、立派な鎧をもらったが、ぼんやりして夢のような心地である。

三年越し連れ添って、なんの変ったこともない貞淑な妻が、どうしてそんな事をしたのか。さりとて將軍の言葉に嘘があらうとは思われない。

だがいろいろ考えてみると、なるほど思い当たることもある。半年前の扇子の時にも、今度の鎧の問題にも、妻はいつでも先を見越したようなことを言っただけで自分を慰めてくれる。それがどうもおかしい。たしかに不思議だ

妻　いつかの扇子のときも、今度の鎧についても、あなたは大層心もちを悪くしておいでのように思いましたから、どうかしてお心もちの直るようにならねえと、わたくしも心から念じていました。その真心が天に通じて、自然とそんな不思議があらわれたのかも知れません。わたくしも自分の念が届いて嬉しゅうございます

張訓　なるほど、真心に感謝する

張訓と妻、顔を見合わす。

語り どうにも気が済まなかったが、その後も注意して妻の挙動をうかがっているうちに、前にも言う通りのわけで世の中はだんだんに騒がしくなる。將軍も軍務に忙しいので、張訓の妻のことなどを詮議してもいられなくなった。張訓もまた自分の務めがいそがしいので、朝は早く出て、夕はおそく帰る。

こうして半月あまりを暮らしていると、梅雨が毎日ふりつづく。それも今日はめずらしく午後から小やみになって、夕方には薄青い空の色がみえて来た。

張訓も今日は自分の仕事が早く片付いて、まだ日の暮れ切らないうちに帰ってくると、いつもはすぐに出迎えをする妻がどうしてか姿をみせない

張訓 うちへはいつて庭の方をふとみると、庭の隅には大きい柘榴の木があって、その花は火の燃えるように紅く咲き乱れている。妻はその花の陰に身をかがめて、なにか一心にながめている

語り そつと庭に降り立って、ぬき足をして妻のうしろに近寄る。柘榴の木の下には大きい『がま』が敢然としてうずくまっている。その前に酒壺をそなえて、妻は何事をか念じているらしい

張訓 そのがまは、青い苔のような色をして、しかも、三本足であった

語り 張訓は武人で、青蛙神もなにも知らなかった。かれの眼に映ったのは、自分の妻が奇怪な三本足のがまを排している姿だけである。

かれはたちまちに自分の剣をぬいた。

妻は、背中から胸を突き刺された

妻、倒れる

語り 張訓はしばらく夢のように突っ立っていたが、やがて気がついて見回すと、三本足のがまはどこかへ姿を隠してしまつて、自分の足元にころげているのは妻の死骸ばかりである

張訓 ああ！妻の挙動はたしかに奇怪なものに相違なかったが、一応の詮議もせずに、一途にはやまって成敗してしまつたのはあまりに短慮であった。しかし今更どうにもならない。將軍に、ご報告せねば

將軍 おまえの妻は、やはり一種の鬼であったのだ

*

少年 蛙の神様にお祈りしていた妻が殺されるだなんて

あやし 大いによろしい

あやし 当然妻の亡骸は誰か食ったんだろう

あやし おれは生きたのがいいな

あやし おや、どうしたんだい。がたがた震えて

あやし 恐怖のにおいはいいにおい

少年 あまりにみんなが上手いから、興奮してるんだ。恐ろしいほどにみんな上手だな！

あやし さもありなん

あやし さあ続きをやろう

*

語り それから張訓の周囲にはいろいろな奇怪な出来事がつづいてあらわれた。かれの周囲にはかならず三本足のがまがつきまどっているのである。

語り 室内にいれば、そのいすのそばに這っている

語り 庭に出れば、やはりそのあとから付いてくる

語り あたかも影の形にしたがうが如きありさまで、どこへ行ってもかれのあるところにはかならず、青いがまのすがたを見ないことはない。それも最初は一匹であったが、のちには二匹となり、三匹となり、五匹となり、十匹となり、大きいのもあれば小さいのもある。それがぞろぞろとつながって、かれのあとを付けまわすのである。

張訓 このがまの群れは、もちろん、私の眼に見えるだけで、ほかの者にはなんにも見えないのである。もうたまらない！と切り払おうとするが、一向に手応えがない。ただ、前にいたがまがうしろに位置をかえ、左にいたのが右に移るにすぎない。

語り そのうちに彼らはいろいろの仕事を始めて来た。張訓が夜寝ていると大きいがまがその胸のうえに這い上がって、息が止まるかと思うほどに強く押しつけるのである。食卓にむかつて飯を食おうとすると、小さい青いがまが無数にあらわれて、皿や椀の中へ片っ端から飛び込む。

それがために夜もおちおちは眠られず、飯もろくろくには食えないので、張訓も次第にやせ衰えて半病人のようになってしまった

少年　　なんてことだ

語り　　一方、かの賊軍はますます横行し、都もやがて危うい

將軍　　張訓、おまえはまるきり病人だ。部隊から外してもよいのだぞ

張訓　　いや行きます。私は武人であるし、得体もしれないがまの怪異に悩まされて、いたずらに死を待つよりも、忠義の屍を横たえたほうがましです

將軍　　もう帰れないかもしれない

張訓　　覚悟のうえです

語り　　行軍の途中、部隊は野営をすることになった。柳の大樹の下に休息していると、初秋の月のひかりが鮮やかに鎧の露を照らした。この鎧は、かれの妻が將軍の枕もとに立って、取り替えてもらったものだった。

張訓　　おや、琵琶の音が聞こえる

將軍　　私には聞こえない

張訓　　聞こえる。これは妻の撥音に相違ない。不思議なこともあるものだ

將軍　　どこへ行く、張訓。これは唯事ではない。追うぞ

語り　　すぐに引き返して三、四人を誘って、明るい月を頼りにそこらを尋ね歩くと、村を出たところに古い祠があった。あたりは秋草に被われて、祠の軒も扉もおびただしく荒れ朽ちている。虫の声は雨のようにきこえる。草むらをかき分けて、その祠の前までたどり着くと

將軍　　あつ

語り　　祠の前にはがまのような形をした大きい石がわだかまっついていて、その石のうえに張訓の兜が載せてあった。そればかりでなく、その石の下には一匹の大きい青いがまがあたかもその兜を守るが如くにうづくまっていた。それが三本足であるかどうかを確かめようとする間もなく、がまは消えるように失せてしまった

張訓　　張訓は、祠のなかに冷たい体を横たえて、眠ったように死んでいた

全員 わーっ

あやし 楽しいな

あやし 張訓おいしかったかな

あやし テレビに入った気分だった

あやし またやりたい

あやし 次は鬼火も呼ぼう

あやし お腹すいた

少年 なんて恐ろしい。梅沢先生が言っていた「触らぬ神に祟りなし」ていうのはこういうことなんだ。どうしよう。母さんは昨日、あの置物に僕の成績アップをお願いしていたし、僕は気持ち悪いと言ってしまった。

あやし お腹すいた

あやし そろそろ食べないか

あやし がまん限界

あやし 食べるなんて勿体ない。こいつは面白いほうの人間だよ。このままあたしたちの世界に連れて行こう

あやし それがいい、おまえもあやしになればいい

あやし 試験も何にもない

少年 みんな落ち着いて、今のはリハーサルだよ。今度が本番だ。さあもう一回

あやし やだ面倒臭い

あやし 今度は別のことをやろう

あやし 鬼ごっこしよう

あやし つかまったやつを食べてもいい

少年 別のお話をやろう。この本はまだ続きがあるんだ

あやし だったら一緒にあやしになろう

あやし あやしになって一緒に遊ぼう

あやし あやし あやし われらはあやし（歌い続ける）

あやし こっちへおいで

あやし こっちへおいで

あやし こっちへおいで

少年 いやだ。僕は行かない。母さんに青蛙神のことを伝えないといけないんだ

あやし さあ早くこっちへ

少年 いやだ、母さん、父さん。

と、コケコッコ。

青い光。

暗転。

語り さるほどに暁になりぬ。打見廻したればありし寺もなし、遙々とある野の来し方も見えず人の踏み分けたる道も見えず行くべき方もなければ、あさまし。

明るくなる。

少年 気がつけば、ぼくは梅沢先生の家の前で立っていた。東の空から燦々輝く太陽が顔をのぞかせている。スマホを見れば、大量の着信。母さんから。時間は朝の6時をまわったところだった。大きな門、古めかしい屋敷。角を左に曲がればぼくの家。おそるおそる角を曲がれば、ぼくはようやく家にたどり着いた。

玄関に手をかける。鍵がかかっていない。不用心だ。

ただいま

居間を覗くと母さんがソファで横になっている。

僕を見て、起き上がる。

母 母に無言で朝帰りとは何事だ

少年 た 母さんの目は真っ赤で、まぶたはパンパンに腫れている

母 母 梅ちゃんが、朝まで待ってみなさいって言うから待ってみたけど。何よ、平気な顔して帰ってきて

少年 そうだ母さん、蛙の神さまは？梅沢先生がお寺か神社に預けたほうがいいって

母 母 それがね、昨日の夜、青く光ったと思ったらいなくなっていたの

少年 ええっ

母 母 残ったのは箱だけ。あんたが無事に帰ってきましたよ。うってお願いしたから、探しに行ってくれたのかな。どう？

少年 母 っ っ たよ …… 青蛙神はきちんとすれば福の神なんだって先生言

母 母 ちゃんとお礼をしなくちゃね

少年 母 先生に相談しよう。それから母さん、できるだけ訪問販売は断ってね

母 母 梅ちゃんにも怒られた

少年　それから、心配かけてごめん

母　今度からメール一本入れること

少年　それから、勉強、もうちよつと頑張る

母　いい心がけだ。さて、朝ごはん何にする？

おだやかな音楽が流れる。

と、ノイズ混じりにニュース音声。

ニュースキャスター　…未明、池のそばで男性の変死体が発見
されました。遺体は近隣で開運グッズなどの訪問販売をしていた
男とみられ、金銭トラブルから…

Fin

付録

妖怪わさわさのうた

朝だ 昼だ 夕方 夜だ

起きて食べる 遊んで笑う

こうしてぼくらは 大人になる

そうしてぼくらは 年をとった

目をこらせば あぶないものが

化かしあそぶ 妖怪わさわさ

そうしてぼくらは 年をとって

いつしか気がつけば 妖怪だった

朝だ 昼だ いつものことだ

生まれ 遊ぶ たまには学ぶ

こうしてぼくらは 大人になる

そうしてぼくらは 年をとった